

氏 名	神 原 裕 子
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 の 番 号	甲第 185 号
学位授与年月日	2015（平成 27）年 3 月 20 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学 位 論 文 題 目	新人看護師のリフレクションを支援する指導に関する研究
論 文 審 査 委 員	主査 澤本和子 （教育学専攻 教授） 副査 吉崎静夫 （教育学専攻 教授） 副査 今井康雄 （教育学専攻 教授） 副査 村松照美 （山梨県立大学看護学部教授） 副査 酒井 朗 （大妻女子大学教職総合支援センター教授）

論文の内容の要旨

概要

本論文は、新人看護師教育の主要な課題である「看護実践能力」の修得を支援する方法について、ドナルド・ショーンの「行為の中のリフレクション」¹に注目して研究したものである。特徴は、新人看護師と指導者を対象としたインタビュー、アンケート、指導場面の参加観察など、複数の調査結果をもとに、「リフレクション」を支援する具体的な指導方法を検討した点にある。

新人看護師教育は、「看護実践能力の低下」をはじめとした多くの課題が指摘されてきた²。そして、度重なる検討が加えられた結果、看護実践能力の育成を主たる目標とした「新人看護職員研修」³が2010年4月から開始された。しかし、そこで修得がめざされる「看護実践能力」は100項目余りの構成要素に分けられ、それらの「統合」、本研究の立場から言い換えれば、「リフレクション」を重視する教育はあまり注目されていない。「専門職」として生涯にわたり成長し続けることが期待される新人看護師は、ショーンが述べる「行為の中の知」を探究する「行為の中のリフレクション」⁴を繰り返し、専門職本来の「看護実践能力」を修得することが望ましいと考える。ところで、新人看護師は看護師として就職して1年未満という極めて未熟な成長段階にあり、看護実践上の課題が多い。新人看護師が自らの実践経験の中で「リフレクション」するためには支援が不可欠であり、その支援方法を明らかにすることが新人看護師教育における重要課題と考えた。

このような研究関心を背景に進めた研究を、本論文には以下の構成でまとめた。

序章

- I 章 看護実践能力を育むには - 新人看護師教育の新たな展開と可能性 -
- II 章 新人看護職員研修のもとで指導を受ける新人看護師の経験からの学び
-新人看護師9名のインタビューから-
- III 章 新人看護師教育に関わる看護師が認識するリフレクションの効果
- IV 章 新人看護師のリフレクションを支援するOJTにおける指導に関する研究
-ナースステーションにおける指導場面を中心に-
- V 章 新人看護師のOJTにおける指導に関する認識
-指導者と新人看護師へのインタビュー調査から-
- VI 章 新人看護師のリフレクションを支援する指導モデルの提案

各章の概要は次の通り。

序章、I 章において、新人看護師教育をめぐる諸状況と問題を概観し、新人看護師教育と専門職教育をつなぐ手がかり、すなわち「専門職としての看護実践能力」の修得を支援する方法の中核に「行為の中の

¹ ドナルド・A・ショーン (著), 柳沢昌一・三輪建二 (監訳) (2007) 『省察的実践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』 鳳書房, 50-62.

² 厚生労働省 (2007) 『看護基礎教育の充実に関する検討会報告書』 厚生労働省医政局看護課,
<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html>

³ 保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正 (2009, 7月)

⁴ 前掲書, 1, 50-62.

リフレクション」を位置付ける必要性を述べて、研究の進め方、研究枠組みを示した。特に、「新人看護職員研修」の修得目標として提示された「臨床実践能力」の考え方については、異なる立場を明示しながら「リフレクション」への着目の重要性を前述のように強調した。

Ⅱ章では、「新人看護職員研修」のもとで指導を受ける新人看護師9名を対象として「看護実践経験の意味づけ」について2度に渡りインタビューした。「看護実践経験の意味づけ」とはすなわち、「リフレクション」に相当する内容を含む。ここで明らかになったことは、新人看護師の学習過程と指導を担う先輩看護師の関わりの内容だった。その中で特に注目されたのは、新人看護師の看護実践経験からの学びは、看護技術の修得自体が通路となって「反省的思考」⁵が促されるという示唆であった。看護技術の修得と「リフレクション」の関連性は、「リフレクション」の支援における重要な示唆でもあった。Ⅲ章では、教育担当者を対象に、「リフレクション」に関連する認識をアンケート調査した結果をまとめた。教育担当者（指導者を含む）は、「リフレクション」に関連する多様な指導方法を工夫し、丁寧にに関わり、「リフレクション」の効果も認識していた。ただし、「リフレクション」に到達度評価を含めている場合があり、「リフレクション」を促すためには、新人看護師の主体性に十分配慮する必要があると考察した。これらの成果はあった、より具体的な指導行動を明らかにすることが課題となった。

Ⅳ章とⅤ章では、「リフレクション」を支援する指導者の行動を明らかにすることを目的に、新人看護師のOJTにおける指導場面に参加観察し、また、観察対象となった指導者と新人看護師を対象に指導に関する認識を事後インタビューした結果をまとめた。指導場面の観察記録から、指導者の指導行動を整理し、指導行動の連鎖の傾向によってパターンを抽出した結果、7パターンの指導に分類された。明確な指導の意図が確認されない1パターンを除き、6パターンについて「リフレクション」支援との関連性を検討した。その結果、「尊重パターン」、「解説パターン」、「課題継続パターン」は、「リフレクション」を支援した可能性が高いと考えられたが、「応答パターン」、「課題解決パターン」、「展開パターン」は、可能性が低いと考えられた。「リフレクション」を支援した可能性の高いパターンと低いパターンの違いは、月別推移と指導内容に表れ、比較的ゆったりとした状況の実践の指導に「リフレクション」の支援の可能性が高いパターンが多かった。逆に、複雑な難しい課題があり、ミスの許されない実践の指導では可能性の低いパターンが多かった。「リフレクション」を支援する可能性の高いパターンに特徴的なことは、新人看護師の実践経験の中に『私』という主体的自我の現れ⁶が見えてくるように支援していたことだった。具体的には、経験を先行させ、その中から気づいたことやわからないことを表現させ、説明する連鎖や、問いかけによって課題を提示してから説明を加えて自己内対話を促すなどであった。Ⅴ章のインタビューの分析結果から、「問う」を起点にした指導や根拠を示した指導が思考を深めたと考えられた。同時に、未熟な新人看護師の立場を尊重し、サポートする指導が、新人看護師が自己を表現することを支援していると考えられた。この結果は、「尊重パターン」、「解説パターン」、「課題継続パターン」の「リフレクション」を支援する可能性を支持するものと考えられた。

⁵ 早川操（1994）『デューイの探究教育学 相互成長をめざす人間形成論再考』名古屋大学出版会、28.

⁶ 前掲書 5, .28.

⁷ 中村雄二郎（1984）『術語集 一気になることば』岩波新書、172.

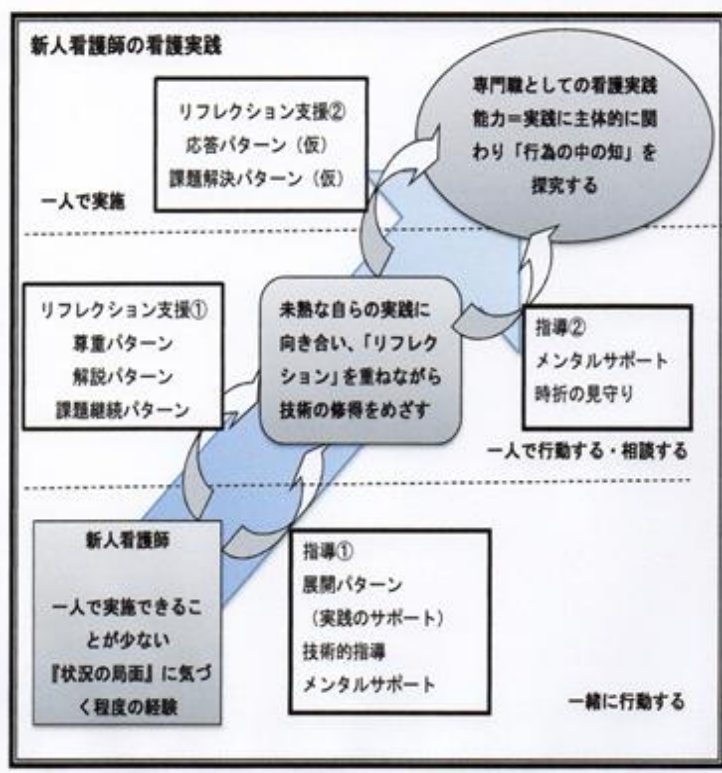


図1 新人看護師のリフレクション支援モデル

看護技術の修得が、通路としての役割を果たし、続いて反省的思考段階に至る主体的自我の現れによって、「リフレクション」が導かれる。この流れは中央の斜めの矢印で表した。新人看護師の「リフレクション」の支援は、この通路が開かれるタイミングで行うことで効果が高まる可能性がある。逆に言えば、通路が通じていない場合は支援は効果的ではない。

新人看護師の「リフレクション」の支援については、次の2度のタイミングに合わせると効果的である。

(リフレクション支援①) 一緒に行動する段階から相談しながら一人で実施する段階へ移行するタイミングでは、「尊重パターン」、「解説パターン」、「課題継続パターン」の3パターンによる指導が、「リフレクション」の支援の可能性が高い。3パターンの指導行動は、経験を先行させ、その中から気づいたことやわからないことを表現させ、説明する連鎖(尊重パターン)や、問いかけによって課題を提示してから説明を加えて自己内対話⁸を促す(解説パターン、課題継続パターン)などである。比較的ゆったりとした状況で実践する看護の指導場面で、リフレクションの支援の可能性が高い。

(リフレクション支援②) 相談しながら一人で実施する段階から一人で実施する段階へ移行するタイミングでは、「応答パターン」、「課題解決パターン」の2パターンによる指導が、「リフレクション」の支援の可能性が高い。具体的には、「問う」、「答える」が繰り返される複雑でミスの許されない実践の指導場面でも、この段階であれば「リフレクション」を支援する可能性が高い。ただし、リフレクション支援②は、①に比べると根拠が弱く、仮の段階である。

新人看護師のリフレクション支援モデルの信頼性を高めることが、今後の課題である。

⁸中村雄二郎 (1984) 『術語集 一気になることば-』 岩波新書, 172.

論文審査結果の要旨

I 論文の概要

本論文は、2009 年の法改正を受けて実施された「新人看護職員研修」¹制度下での、新人看護師の OJT において重視される「リフレクション reflection」を支援する指導に注目し、新人看護師と指導に関わる先輩看護師に対する観察を含むフィールドワーク等を実施し、データを精査・考究して、新人看護師のリフレクションを支援する指導モデルを提示したものである。ここに着地するために、次表の構成で論を展開した。

各章の概要は次の通り。

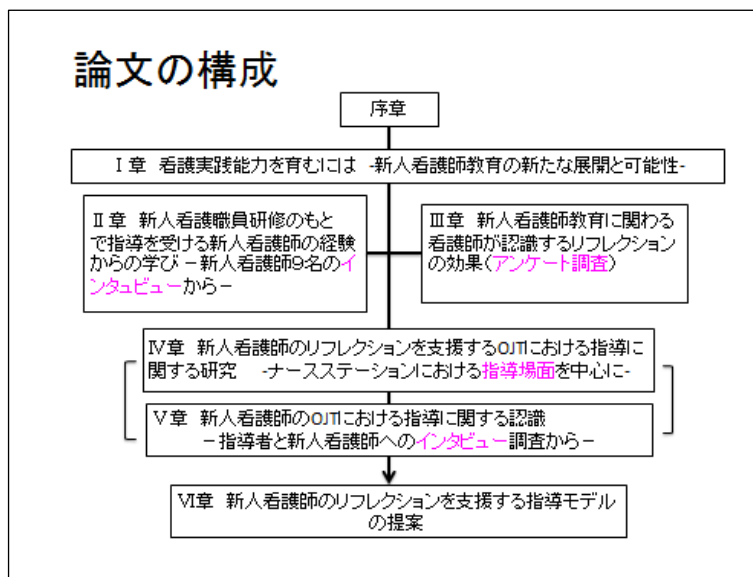
序章・I 章でわが国の看護師養成教育の問題とその専門性育成について検討、考察した。新人看護師教育は、「看護実践能力の低下」をはじめ多くの課題が指摘されてきた²。この背景にある民間依存型養成制度を温存した複雑多様な養成制度の歴史を整理し、少子高齢化や医療の高度化への対応、高等教育拡大に伴う制度改革や医療施策との関係等を取り上げ、それが専門職としての看護師養成と新人看護師研修の問題

に深刻な影響を与えたことを、先行研究に依拠しつつ提起した。その上で、問題の核心が、新人看護職員研修と養成教育における臨床実践学習経験の懸隔にあることを明らかにした。

考察の根拠の 1 は、先行研究を駆使した戦後の養成施策の整理・考察から得た。根拠の 2 は、2008 年以降の OJT に関わる看護学研究論文から、「新人看護師」「指導」「支援」のキーワードを含む先行研究 223 件を検討・分類した結果、以下の多様な課題が抽出され、指導者と新人看護師のコミュニケーションの問題が明らかにされたことである。

①新人看護師の経験（例；辛い経験など） ②新人との認識の比較（例；「指導」を介した認識のずれなど） ③新人看護師の指導・支援（指導者の考えを押し付ける傾向など）

2010 年の実施の手がかりとして、厚生労働省は 100 余項目の臨床実践能力を含む「新人看護職員研修ガイドライン」を公開した。その冒頭には、「看護実践能力の構造としては、Ⅰ基本姿勢と態度、Ⅱ技術的側面、Ⅲ管理的側面」があり、「患者への看護を通して臨床実践の場で統合されるべきもの」とし、看護基礎教育での学びの上に入職後の研修により「臨床実践能力を積み上げていく」ものとす



¹保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正（2009，7月）

²厚生労働省（2007）『看護基礎教育の充実に関する検討会報告書』厚生労働省医政局看護課，<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html>

る。予算措置を伴う制度実施後の実態は、100 余項目の指導が中心であり、「統合」を支援する指導は手薄といわざるを得ない状態にある。

とはいえ、「統合」は看護実践能力の基底をなすものとする。この「統合」は、「技術」の行使という行為の過程の自己内対話、即ち、行為の中のリフレクション＝reflection in action と、事後のリフレクション reflection on/after action という「探究」³により実現可能と考える。中村は「実践とは、各人が身を以てする決断と選択をとおして、隠された現実の諸相を引き出すこと」であり、それにより「理論が、現実からの挑戦を受けて鍛えられ、飛躍する」とする。また、「主体あるいは自己の、他者や世界に対する関わり方において、経験よりはもちろん実践よりもいっそう特殊なもの、さらにいえば、実践のなかの特殊に媒介的なものが＜技術＞である」と言えるだろう、とする。⁴こう考えるとき看護実践能力もまた、個々の看護技術や知識の加算や組合せとは異なる意味を持つ。看護技術は看護実践の中で、とりわけ患者との間で媒介として機能することになる。

この見解はショーンの「行為の中のリフレクション reflection in action」⁵や、デューイの「反省的経験 reflective experience」⁶等から導いた。例えば「身体の向きを変える技術」は、看護実践過程で新人看護師が技術を患者との関わりで行使しつつリフレクションする（in action）経験を、事後にプリセプター（指導者）の問いに答えながらリフレクションし、さらにその後も自らリフレクションして（on/after action）その行為の意味を問い直し、改善の手立てを案出する等の熟考を重ねることで、「探究 reflective thinking」が「統合」への道をひらくと考える。省察的实践家としての「看護師は、目の前の対象に看護実践の主体として関わり続けながら、自らの実践について真摯に考え続け、より質の高い看護を探究する専門職」といえる。新人看護師は入職後 1 年未満という極めて未熟な状態にあり、こうした「リフレクション」を実施するには支援が必要で、その支援方法を明らかにすることが新人看護師教育の課題と考える。そこで仮説的に新人看護師のリフレクション支援概念図を作成した。（図 1）

Ⅱ章～Ⅴ章の各研究は、実施年度の「日本女子大学ヒトを対象とした実験研究に関する倫理審査委員会」の審査での承認を得て実施したものである。

Ⅱ章では、「新人看護職員研修」のもとで指導を受ける新人看護師 9 名を対象として「看護実践経験の意味づけ」について 9 か月目と 12 か月目の 2 度のインタビューを実施した。分析により前者は 140 コード、11 カテゴリー、後者は 185 コード 11 カテゴリーを抽出して考察した。その結果から、「看護実践経験の意味づけ」とはすなわち、「リフレクション」に相当する内容を含むことが明らかになった。さらに、新人看護師の学習過程と指導を担う先輩看護師の関わりの内容で特に注目されたのは、新人看護師の看護実践経験からの学びは、看護技術の修得自体が通路となって「反省的思考」⁷が促されるという示唆であった。看護技術の修得と「リフレクション」の関連性は、「リフレクション」の支援における重要な示唆でもあった。

Ⅲ章では、教育担当者 126 名を対象に、「リフレクション」に関連する認識をアンケート調査した結果を

³早川操（1994）『デューイの探究教育学 相互成長をめざす人間形成論再考』名古屋大学出版会.28

⁴中村雄二郎（1992）『臨床の知とは何か』岩波書店 pp.69-71

⁵ドナルド・A・ショーン（著）、柳沢昌一・三輪建二（監訳）（2007）『省察的实践とは何か プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房、50-62.

⁶早川 前掲書 3.26

⁷早川操（1994）『デューイの探究教育学 相互成長をめざす人間形成論再考』名古屋大学出版会. 28.

考察した。教育担当者（指導者を含む）は、「リフレクション」に関連する多様な指導方法を工夫し丁寧に
関わり、「リフレクション」の効果も認識していた。ただし、「リフレクション」に到達度評価を含めてい
る場合があり、「リフレクション」を促すためには、新人看護師の主体性に十分配慮する必要があることも
指摘された。残された課題は、指導者の具体的な行動を明らかにすることである。

IV章では、「リフレクション」を支援する指導者の行動を明らかにすることを目的に、新人看護師のOJT
における指導場면을参加観察した。5月～7月の各月に1回ずつ4病棟の各ナースステーションを中心に、
日勤帯（8：30～17：45）に延べ12回（日間）実施した。

V章では、観察対象となった15人の指導者と8人の新人看護師を対象に指導に関する認識を事後インタ
ビューした結果を考察した。指導場面の観察記録から、指導者の指導行動を整理し、指導行動の連鎖の傾
向によりパターンを抽出した結果、7パターンの指導に分類された。明確な指導の意図が確認されない1パ
ターンを除き、6パターンについて「リフレクション」支援との関連性を検討した。表は、抽出した「尊重
パターン」の一例である。

No	月	指導 内容	観察記録	観察記録を読んだ感想	
				指導者の記述	新人看護師の記述
14A	5	理 術後 1日目の 観察、 点滴管	新人看護師が観察のために訪室した際、あえて言わなかった（見守る）。新人看護師は術後1日目の患者の観察結果を報告する（報告を聴く）。指導内容について、観察ポイント、判断のしかた、血圧と降圧剤、痛み、炎症と抗生剤の関連を説明する（説明する）。新人看護師は、メモをとりながらうなづいて	無駄な行動を少しで も無くすために実際 に行動をとってもら ってからあえて注意 しようと思っていた。	最初の時点ですべて言 うのではなく、後から指 摘があって、自ら気づけ るようにしてくれたの かと思った。

分析の結果、抽出した「尊重パターン」、「解説パターン」、「課題継続パターン」は「リフレクション」
を支援した可能性が高く、「応答パターン」、「課題解決パターン」、「展開パターン」は可能性が低いと考え
られた。「リフレクション」を支援した可能性の高いパターンと低いパ

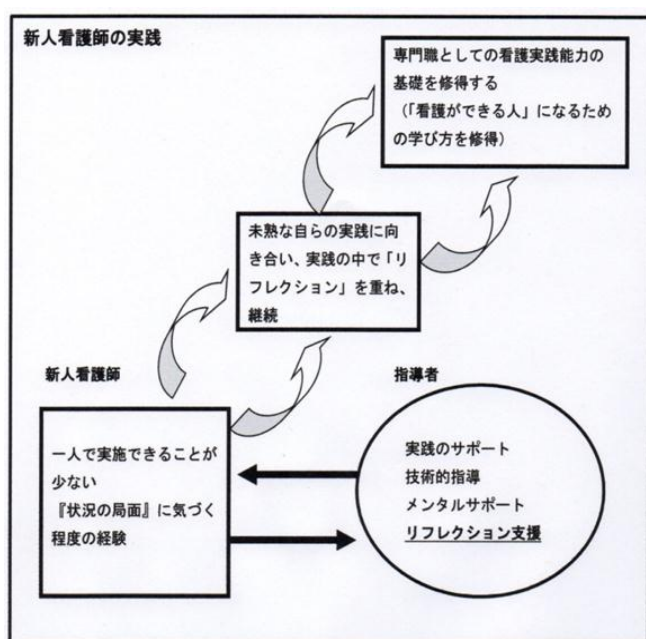


図1 I章の仮説概念図

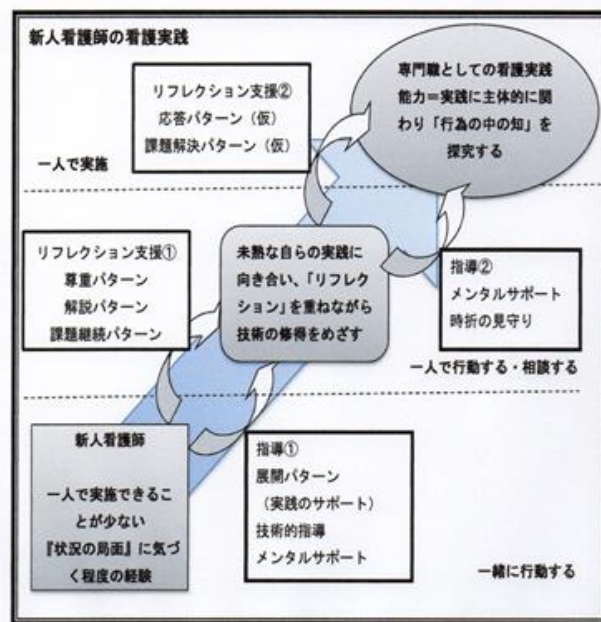


図2 V章の結果を踏まえた図(案)

ターンの違いは、月別推移と指導内容に表れ、比較的ゆったりした状況の実践の指導に「リフレクション」の支援の可能性が高いパターンが多かった。V章で示した分析カテゴリーから「リフレクション」を支援する可能性のある指導は、「問う」を起点にした指導や根拠を示した指導が思考を深めたと考えられた。同時に、未熟な新人看護師の立場を尊重し、サポートする指導が、新人看護師の自己表現の支援となる可能性が推察された。表1の事例No.14は、自己内対話⁸を促す支援の一例である。

VI章では、本研究の総括として、新人看護師の「リフレクション」を支援するモデル(図2)をまとめ、提案した。

I章の概念図と比較して新たに加えたのは、新人看護師の変化を行動面から、共に行動する段階、相談しながら一人で行動する段階、一人で実施する段階の3段階に分け、各段階に現れてくる新人看護師の実践のレベルを示した点である。ただし、これは傾向性として提示した。これは主にIV章の分析、考察からリフレクションの支援内容との関係で分類整理したものだが、II章の考察も考慮した。一人で実施する段階における実践のレベル表現(右上の○の中の表現)がI章の概念図と異なっているのは、専門職としての看護実践能力の基礎を明確に「行為の中の知」の探究と示した点である。実践レベルとしての表現で揃えたという意味もあった。

その上で、指導者の指導とリフレクション支援を実践レベルに応じて示したが、これも主にIV章の結果を根拠にする。I章の概念図では、指導者の指導を新人看護師との相互交流の矢印のみで示したが、リフレクション支援とそれ以外の指導を新人看護師の実践レベルの段階に合わせて示した。中央の太い矢印で示したのが、看護技術の修得が通路としての役割を果たし、続いて反省的思考段階に至る主体的自我の現れによって看護の意味を見いだす学びを示す。

⁸中村雄二郎(1984)『術語集 一気になることば』岩波新書, 172.

以上を踏まえ、リフレクション支援モデルは新人看護師の実践レベルをより明確に示し、実践レベルに応じたリフレクション支援の内容を具体的な指導行動として示した。看護技術の修得が通路としての役割を果たし、続いて反省的思考段階に至る主体的自我の現れによって、看護の意味を見いだす学び、「リフレクション」が導かれる。この流れは中央の斜めの矢印で表した。今後は、調査を継続しながらモデルの信頼性を高めることが課題である。

II 審査結果報告

2010 年度から実施された新人看護職員研修は、論文にもあるとおり現職の先輩看護師が職務に従事しつつ指導も実施する中で、100 余項目の臨床実践能力修得に多くのエネルギーが注がれている実態がある。そこで謳われる「統合」は、ピースミールの知識や技術を患者への看護行為の実施を介して、患者との相互作用の中でのリフレクション (in action) という反省的思考をくぐらせることを通じて、そして、それも含めて、事後のリフレクション (on/after action) という更なる反省的思考を通じて、デューイのいう「反省的経験」化するものと考えることができる。今日の教師教育・授業研究の分野では、リフレクションやその成果としての統合化された知（実践的知識）の重要性は広く認識されつつあるといえる。

本論文は、こうした先進的知見を活かしつつも、手堅い文献研究と、アンケート調査・インタビュー調査、参加観察という多様な手法を駆使して、新人看護師の成長とその課題を考察したものである。表題のテーマに即して、この分野で新たに新人看護師成長のためのリフレクション支援のモデルを開発し提示している。研究上の制約が重く、また、研究のフィールド開拓にも困難を伴う分野でありながら、精緻なデータ収集と分析を実施して、新たな研究方法と考察結果を示すなど優れた研究成果を得ている。こうした点に着目し、本論文の完成度の高さや、新人看護師教育への実践的・学問的意義を、審査委員全員が高く評価した。

以下、審査結果を具体的に提示する。

新人看護師教育においては、マニュアル的な知識や技術の伝授よりも、「反省的实践家」の形成につながるような「行為の中のリフレクション」の成立が重要だという序章と I 章における課題意識は非常に説得的である。とりわけ新人の実践的能力としてリフレクションの重要性を指摘し、さまざまな技能を統合して「わざ」化することの重要性を指摘している点は、教師の専門的成長をめぐる議論に対しても参考になるところが大きい。また、新人看護師教育に関する動向を踏まえた文献研究をはじめ看護実践に関わるキー概念を多様な視点から検討し、新人看護師教育の先行研究から課題を絞り、研究の方向性を明示した点も説得力があった。

II 章のインタビュー調査とそのカテゴリー化を通して、9 か月目から 12 か月目にかけての新人看護師の意識変容が浮き彫りになっている。対象＝技術に向かっている意識から技術を通路として「私」が意識に上ってくるという反省的思考の成立過程が析出されているのは興味深い。この点も、授業研究や教師教育研究成果との照合が可能なところと考える。

III 章では、教育担当者である 126 名の看護師にアンケート調査を実施し、メッセージ分析や内容分析、データマイニングなどの手法を駆使してデータ分析を行い、先行研究結果を参照しつつ、リフレクションの必要性の認識、多様な手法、同僚性の重視、の結果が考察された。

Ⅳ章とⅤ章では、日勤時間帯という長時間にわたるナースステーションを主とする参加観察とそのデータ分析、及び新人看護師と指導者双方へのデータのフィードバックを踏まえたインタビュー調査結果の分析・考察を行った。特に病棟という看護実践の現場での研究展開は、看護職の研究の在り方への大きな提案であり質の高い研究といえる。また、指導者と新人看護師のコミュニケーションを詳細に記述・分析し、「リフレクション」の成立に資するように指導パターンの抽出に取組んだ点を評価する。Ⅲ章～Ⅴ章を通じて、単なる意図や結果への着目にとどまらず、コミュニケーションそれ自体を分析しようとする問題設定、膨大なデータを極力客観的に分析してパターン化しようとする方法論など、そのアプローチは高く評価できる。看護実践の実態がデータ化され、その結果を基に根拠をもって新人看護師を指導する道もひらかれたといえる。さらに指導看護師におけるリフレクション研修の重要性等も示唆され、指導者の力量形成に向けた研修体制の在り方についても本論文が提起するものの意義は大きく、看護職の専門性成長に資する研究と評価できる。

以上の通り、高い評価を受けたが、今後の研究の発展のために参考までに課題となる点を次に述べる。1点目は、Ⅲ章の調査で、「リフレクション」の意味に「振り返り」を含めて調査を実施した点である。看護現場の状況への配慮によるものと理解できるが、次の段階として「リフレクション」の捉え方の多様性に焦点化する研究が必要である。2点目は、Ⅰ章で提起した「統合」と「臨床実践能力」の関係について、「統合」に関与する「リフレクション」の意義は考察されたが、データ分析を通して両者の関係をいっそう明らかにする必要があるという課題である。Ⅳ章・Ⅴ章等で、「統合」について触れてはいるがさらなる考察が期待される。3点目は、新人看護師の成長に伴い、リフレクションを促す指導者の手だての何が変わっていくのか、という課題である。そのキー概念は何かを追究する必要性である。また、リフレクションを促す指導者の手だては、看護場面の状況により、何が本質的に変わるのかを明らかにすることも、困難な研究課題ではあるが、今後の課題といえる。

以上の審査を経て、神原裕子「新人看護師のリフレクションを支援する指導に関する研究」は、博士（教育学）を授与するに十分ふさわしい優れた論文である、との評価を全員一致で下した。